

教えて！坪倉先生 気になる“ほうしゃせん”

テーマ 内部被ばくは、どうだったの？ - その2 -



福島県立医科大学 医学部放射線健康管理学講座 主任教授

つぼくら まさはる
坪倉 正治氏

Profile 医学博士 内科認定医 血液内科専門医・指導医
2006年3月東京大学医学部を卒業、2011年4月から東京大学医学研究所研究員として勤務。東日本大震災発生以降、毎週福島県浜通りに向き、南相馬市立総合病院、相馬中央病院を拠点に医療支援を行っている。血液内科を専門、内部被ばく関連の医療にも従事している。2020年6月から現職。

多くの市町村で検査を終了

今でも毎年、万の単位でこの検査結果を見ているのですが、もうほとんど体内からセシウムを検出しなくなつてから10年以上が経過しています。たまに検出する方でも、胸のレントゲン1枚分の放射線量に到達するかどうかといったレベルです。内部被ばく自体が健康の問題を引き起こす可能性はないと言い切つてよい状況です。

南相馬市では「スーパーで福島県産の食材を避けることがあるか」といったアンケートも定期的の実施しています。小さい子どもをもつご両親では、2013年頃は75%程度が福島県産を避けることがあるという状況だったのに対して、現在では10%前後までその数字は下がっています。この数字を低いと思うか高いと思うかはそれぞれだろうとは思いますが、もちろんどちらの食材を選んだとしても内部被ばくのレベルが変わることはありませんし、両方ともに安全です。

内部被ばく検査は、器械が基本的には成人を対象として設計されていますが、乳幼児の内部被ばくを計測してほしいという要望もありました。そのため、BABYSCAN^{※1}という乳幼児専用の内部被ばく検査器も開発され、県内の3カ所で検査とカウンセリングが行われていました。

2013年12月から2015年3月までに延べ2707名の0歳から11歳までの小児、乳幼児の検査を実施し、全員から放射性セシウムは検出されませんでした。^{※2}

このように行われてきた内部被ばくの検査ですが、年々検査を受ける方は減っています。2013年頃から、小中学生については定期的に学校単位で検査が受けられることとなり、成人は希望者が来院するというかたちになっていました。しかし、検査者が減ってきたため、福島県内の多くの市町村では検査自

前号から、東京電力福島第一原子力発電所事故後の内部被ばくはどうだったのかということについてお話ししています。今回は、その続きです。

健康に影響する可能性はない

原発事故直後から開始されていた内部被ばく検査では、食品の流通制限や検査、農家の方々の努力など、多くのことが重なり、大多数の人からセシウムを検出することはありませんでした。その一方で、露地物のキノコや山菜、ジビエ類など特定の食材に汚染が集中し、そのような食材を継続的に摂取されている方で、内部被ばくを検出することがありました。

しかし、そのような食材を継続的に摂取している方でも、年間の被ばく量は事故当初から1ミリシーベルトに到達するかどうかという程度で、その数字自体もこの12年の間で大きく下がりました。私自身、

体が終了しています。検査器自体の寿命もあり、検査器が壊れてしまったのにあわせて、検査を終了した自治体もあります。浜通りのいくつかの市町村では、小中学生に対しては現在も継続的な検査を行っている一方、成人については検査希望者が全体の数%といった状況です。

内部被ばくを検出しないまでも、福島県で育つ若い世代が、根拠のない偏見や差別に晒されないように、何かしら結果を残しておくのが私たちの責務だと思いで検査は続けられました。その一方、いつごろまで検査を続けていくのか、どのような状況になればやめるのかといったことも議論されています。

※1 BABYSCAN／従来のホールボディカウンタと比較して、検出限界値が約5分の1から6分の1(50Bq/body)で、新生児(4歳児(45、106㎍、最大1300㎍)に対応。

※2 出典：公益財団法人 震災復興支援放射線対策研究所「調査と研究」2015年10月号
<https://fukukosten-zaidan.net/research/>